

自分で考え行動するための 「生きる力」を学んでほしい

南相馬市

半谷 栄寿 一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会

取材日 2013.07.25

元東京電力執行役員。福島県南相馬市出身。加害者と被害者の両側に立つ者として震災直後から南相馬市に支援物資を運ぶ活動を行っていた。その後は復興のための継続的な仕組みが必要だと考え、一般社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会を設立。仕事体験を通じて「生きる力」を学ぶ施設「南相馬ソーラー・アグリパーク」を運営する。

3月11日 14時46分

東京電力のグループ会社である尾瀬林業株式会社（現：東京パワーテクノロジー株式会社）の代表取締役常務として仕事の打ち合わせを終え、外で関係者をお見送りしている時に大きな揺れが起きた。ビルの目の前にはモノレールが通っている。3階ほどの高さにあるモノレールの車体が、安全のための柵を超えて転げ落ちてくるのではないかと思うほどに大きく揺れた。街中が悲鳴の渦だった。

揺れが収まってから職場のある5階に戻った。尾瀬林業は、福島県・新潟県・群馬県の3県にまたがる尾瀬地区の観光という利用面と環境を守る面を両立させる仕事をしている。当時、尾瀬は山開き前だったため登山などを行っているお客様はおらず、安全確認の必要性はなかった。そのため、すぐに従業員と従業員の家族の安否確認を行なった。従業員の安否確認は容易ではなかった。携帯電話がつかならず、通信手段がなかったためだ。南相馬に1人で住む自分の母親の事も気になっていたが、電話はつながらなかった。12日の朝、従業員の安否確認が完了した。安心し、ふと思いついて母親に電話したところ奇跡的につながった。従業員と母親の安否確認ができ、大変な中ではあったが、よかったと安堵する思いだった。

南相馬へ物資支援

2011年6月まで東京電力の新規事業部の担当役員をしており、原子力発電の安全性を信じていた。だが、大震災後の水素爆発、放射性物質の飛散によって原子力発電所のある福島県双葉郡や南相馬市から多くの方が避難しなくてはならなかった。役員だったのだから、この事故には私にも責任がある。一方で、私自身も南相馬の出身者だ。従業員の安否確認が終わった瞬間から東京電力の元役員として、そして南相馬の出身者として何ができるかを考え始めた。南相馬の放射線量は現在も当時も低いのだが、風



評被害が激しかった。例えば、タンクローリーは郡山まで運転してくれるが、南相馬までは入ってくれない。大震災の被害に加えて風評被害が激しかった事で物流は途絶えた。物資が足りない危機的な現実が、間違いなく目の前にあった。そうした状況を知って、多くの企業から支援物資を頂戴し、東京から南相馬まで物資を運んだ。初めて南相馬に入ったのは2011年3月19日だった。東京から南相馬まで往復約800km。縁があって借りる事ができた2tトラックで、週末を利用して計6回に渡って支援物資を運んだ。毎週のように物資を運んでいたため、ガソリンスタンドやコンビニエンスストア、スーパーマーケットが再開したなど、現地の様子が把握できた。物流が回復すれば物資支援の役割は終わる。トラックを運転しながら、復興のための継続的な支援の仕組みを新たに作る事が不可欠だと思うようになった。

子ども達のための体験の場作り

物資支援活動のさなか、懇意になった菓子店「栄泉堂」の女将さんが常々「地元の子どものために何かしてほしい」と仰っていた。その言葉を聞いてから、東京と南相馬を往復するトラックの中で、子ども達のためになる支援の仕組み作りを考えるようになっていた。被災した子ども達の中には、全国からの支援に対する感謝の気持ち、自分

も人のために働きたいという気持ちが生まれている。この貴重な気持ちを「自ら考えて行動する力」に発展させる事ができれば、子ども達の人生はより充実したものになるのではないかと考えた。さらに、原発事故によって岩手や宮城よりも福島の復興は長期化するため、今の子ども達の中から復興を担う人材が現れてほしいと考えた。

子ども達への成長へのプロセスには何が必要かを考えた時、「キッズニア^{※1}」を思い浮かべた。震災前から、私が運営するNPOがキッズニアで林業体験ができるパビリオンを出展している。その際、子ども達が多くの仕事を体験する事によって達成感や責任感を覚え、高いモチベーションを持つ事を感じていた。継続的な支援の仕組み、菓子店の女将さんから託された想い、そして縁のあったキッズニアの事を思い浮かべ、仕事体験を通じて子ども達の成長を支援する仕組みが良いと考えた。原発事故を踏まえ、誰もが賛同する自然エネルギーの仕事体験ができる新しい仕組みを作る構想が、2011年5～6月頃には固まった。そうした構想をキッズニアの住谷社長に相談したところ、その場で全面的な協力を約束していただいた。

※1 子どもの職業・社会体験施設。子ども達が好きな仕事にチャレンジできる、子どもが主役の街。楽しみながら社会の仕組みを学ぶ事ができ、リアルな社会体験を通して子ども達の未来を生き抜く力を育てる事ができる。

官民一体で推進するプロジェクト

構想を現実のものにするために、まずは小さくても会社を立ち上げなければならなかった。そこで、2011年9月に私が代表取締役となって、太陽光発電所の建設・運営を行なう「福島復興ソーラー株式会社」を設立した。南相馬市は再生可能エネルギー推進ビジョンを掲げているため、自然エネルギーの仕事体験ができる新しい仕組みを作る構想に賛同し、協働で「南相馬ソーラー・アグリパーク推進事業」を進める事になった。用地確保や開発許可など行政に求められる業務は、市に主体となって進めてもらう事ができた。市と協働する中で地元住民の農業復興に寄せる想いが浮かび上がってきた。その想いを反映するとともに、発電した電気を活用する施設として、市が復興庁の補助金でパーク内に植物工場を建設する事になった。太陽光発電所の建設構想も、株式会社東芝からの出資と農林水産省からの補助金が決定し、現実のものにする準備は整った。

2012年12月21日、南相馬市と共に「南相馬ソーラー・アグリパーク」の建設着工を発表した。津波被災地の約2.4haを活用し、太陽光発電と植物



撮影：2013.5.9
太陽光発電と植物工場の仕事体験ができる「グリーンアカデミー」

工場による地域再生の先駆けになるとともに、子ども達の自然エネルギーや新しい農業についての体験学習と全国の人々との交流を行なう復興拠点となる事を目指しており、教育委員会や学校と連携する、まさに官民一体となった復興事業だ。

2013年3月11日、南相馬ソーラー・アグリパークが完成した。どうしてもこの日に間に合わせなかった。植物工場では地元の農業法人が野菜を栽培し、収穫した野菜はヨークベニマルの店舗で販売している。風評被害に負けない、安心安全な新しいブランドを作って定着させたい。2013年5月9日には、太陽光発電と植物工場の仕事体験を通じて子ども達の成長を支援する「グリーンアカデミー」を開講した。市と協力し、教育委員会や学校の賛同を得て、すでに32回、延べ880人以上の生徒が体験学習に訪れた（2014年2月末現在）。生徒や先生からは、非常に楽しくなったと好評をいただいている。

体験学習は、「福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会」が運営する。複数の企業・団体に支援を求め、協働スポンサー体制を構築している。体験装置や運営プログラムはキッズニアと協働で制作した。

継続的な人材育成に貢献するために

今後の課題は、子ども達の成長を継続的に支援していくため、この社団法人が存続できる仕組みの構築だ。太陽光発電所は国の固定価格買取制度を活用し、植物工場は野菜をヨークベニマルに卸す事で、自立して継続できる仕組みになっている。しかし、これらは別組織である。体験学習を継続するためには、社団法人として独自に継続できる仕組みを確立しなければならない。現在は個人、企業、団体の寄付によって成り立っている。しか

し、今後も活動を継続し続けていくためには寄付だけに頼らず、事業活動を行なっていく必要がある。

絶対に大切な事は、事業内容が本来の目的である「子ども達のためになる」ものである事だ。だから、「子ども達のためになる」コンテンツや体験プログラムを徹底的に研究し、充実させていく必要があると考える。そして、設備やコンテンツなどを作るハード面だけではなく、スタッフのレベルアップも欠かせない。これを踏まえ、今後は太陽光発電だけでなく、2014年2月末までに風力、水力発電などを完成させ、自然エネルギーについての仕事体験の装置やプログラムを充実させる。また、子ども達と一緒に体験学習を行ない、「自ら考えて行動する力」を育むためには、「自ら発表する力」も重要だという考えに至った。それを実現するために、2014年5月からは体験や学びに意欲的な子ども達のために、発表する力を育むための週末オープンスクールを継続して開催していく予定だ。環境ジャーナリストの枝廣淳子さんなどの識者の方や、東北大学、いわき明星大学、三菱商事エネルギー部門、東芝未来科学館など、産学民と連携したパートナーシップで運営をする。成長した子ども達がスクールの運営役として参画し、後輩の育成に携わる事で社会経験を積み、復興を担い得る人材として成長する事を期待している。

その上で、さまざまな方法を取り入れて、寄付以外の受益者負担の仕組みを作っていきたい。受益者負担があるならば、寄付は続いていくと考えている。個人も企業、団体も、復興に役立っているところに寄付したいと考えるのだから、当事者の私が「復興に役立っている」と言うよりも、受益者負担の存在そのものの方が説得力がある。

目的はソーシャルだが、仕組みはビジネスでなければ継続できない。長い時間のかかる復興となる事は誰の目にも明らかだ。活動が継続できる仕組みを作る事が、私がこれから責任を持って取り組む事の中で一番大きな仕事だ。

原点は子ども達の成長支援

地震と津波に加えて、福島県には原子力の災害がある。私は2010年まで東京電力の役員の端くれだった。だから、原子力発電所の事故による災害に対する責任は免れない。そうした意味で加害者側だ。一方で生まれは南相馬で、実家もある。母親は1人暮らしだったが南相馬で隣近所の皆さんや親戚と元気に暮らしていた。そうした意味では被害者側の立場にもあると言える。大震災以降、加害者側と被害者側の狭間の中でいかに復興に取り組んでいくのかを考え続ける原点は、体験学習

による子ども達の成長支援だ。南相馬市、団体や企業、パネルオーナーの個人の皆さん、パークに花を植えてくれた地域の皆さんなどのご協力を得ながら、スタッフと共に福島の復興を担う人材の育成に邁進していこうと思う。原子力発電所の災害は償いきれない責任だけれども、復興に向かって少しでも前進する事によってその責任を果たしていきたい。



撮影：2013.6.17
太陽光パネルの方角と角度を動かして発電研究体験



撮影：2013.11.27 太陽光発電で使った植物工場の野菜で食育